

○石井正光、小林裕美、水野信之

(大阪市立大学医学部皮膚科)

高橋邦明(大東市・高橋皮膚科)

山本 巖(大阪市・山本内科)

〔目的〕 難治アトピー性皮膚炎患者の治療は未だ確立していない。重症例の増加はこの15年のことであり現代に現れた特殊な病態と言える。この真因に迫るには戦後の環境汚染、飽食、生活様式の激変などにつき検証すべきである。私共は種々の理由から、最も疑った食について難治な病態がなかった頃の食に戻すこととし、今迄当科で行ってきた漢方薬と西洋薬の併用を行って長期の沈静化とシューブの消失を指標に確認したところ高い有効性が認められた。

〔方法〕 種々の悪化要因が存在するため、使用していた外用剤や化粧品、石鹸などによる悪化が疑われるものは皮膚パッチテストを施行して、原因を明らかにし、使用を中止して軽快するような症例はこの統計に入れていない。すなはち、悪化要因のはっきりしない原因不明の重症又は難治の症例を対象とした。一般的な西洋医学的治療は併用することとし、抗ヒスタミン剤、抗アレルギー剤、眠剤、乳酸菌製剤などの内服を併用した。ときに最小限のステロイドの内服も行ったが可及的に減量中止した。ステロイド外用はできるだけマイルドなもので始め軽快すれば中止するよう努めた。漢方の有効性証明のため一時的改善はとらず重症の長期観察を行い、改善後に常識とされる再燃の消失がみられるか否かで評価し正確な治癒判定を試みた。この3年間に石井外来を受診し、2カ月以上漢方薬を内服した難治の113例につき5段階評価を行い、改善の長期持続をもって有効性を評価した。

〔成績と結論〕 6カ月以上3段階以上改善持続の著効率は30.1%、そのうち皮疹free 6カ月以上は27例、1年以上freeも15例あった。有効例は37例でかなりのもので軽微となっていた。有効以上は113例の63%であり、重症難治症例の長期のシューブ消失を指標とした効果判定法で極めて高い値が示された。